

令和8年度 目黒区立油面小学校 学校経営方針（詳細版）

令和8年9月1日 校長 佐藤 公

目黒区の目指す学校

【目黒区のめざす学校】

《魅力と活力にあふれ、信頼される学校》

- ・魅力ある学校…確かな学力など子どもの生きる力をはぐくむ学校
- ・活力あふれる学校…子どもと教職員が生き生きと学び活動できる学校
- ・信頼される学校…子ども・保護者・地域から信頼される学校

1 学校経営の基本的な考え方

創立100周年という大きな節目を迎えた油面小学校は、長きにわたり地域や保護者、卒業生とともに築き上げてきた歴史と伝統を礎とし、その価値を継承しながら、次の100年への新たな歩みを進めていく。

「子どもは学ぶ力をもっている」という信念のもと、一人一人の可能性を最大限に引き出し、主体的に考え、対話し、協働しながら学び続ける子どもの育成を目指す。

また、子ども・教職員・保護者・地域が互いを尊重し、子どもが安心して挑戦できる心理的安全性の高い学校風土を醸成するとともに、「毎日が『来たい（期待）』であふれる学校」の実現を目指し、学校全体が学び続け、成長し続ける学校経営を推進する。

2 学校教育目標

・考え深い子ども ・きまり正しい子ども ・元気でじょうぶな子ども ・心の美し

3 目指す子どもの姿

自分とともに仲間を大切にできる子ども

「自分を大切にする」とは、自らの可能性を信じて何事にも挑戦するとともに、自分の体や心の健康を大切にし、自分らしい生き方を主体的に切り拓こうとすることである。

一人一人がかけがえのない存在であることを実感し、自分自身を肯定的に受け止めることができる子どもを育てたい。

「仲間を大切にする」とは、友達や周囲の人々の考えや意見、感じ方の違いを尊重し、一人一人の存在をかけがえのないものとして認めることのできることである。

相手の立場に立って考え、思いやりの心をもって行動し、ともに支え合いながらよりよい関係を築こうとする子どもを育てたい。

本校では、このような「自分とともに仲間を大切にする子ども」を育むことを学校教育の根幹と位置付ける。

目指す子どもの姿を目標の字面を共有することではなく、『「自分とともに仲間を大切にする子ども」とは、自分の学級または、自分が受け持つ学級ではこういう姿だね』と一人ひとりの教員が自分の言葉で語れることが、「いい学校」をつくっていくという認識のもと、日々の授業や学校生活、行事や特別活動のあらゆる場面を通して、一人一人の人権が尊重される学級・学校づくりを推進し、互いの違いを認め合いながら安心して学び、成長できる環境を整えていく。

4 目指す学校の姿

毎日が『来たい(期待)』であふれる活気ある学校

本校が目指すのは、子どもたちにとって毎日が「来たい(期待)」であふれる活気ある学校である。

「来たい」とは、学校に行きたい、友達や先生に会いたいと思える気持ちである。これは、授業が分かりやすく面白い、友達と関わるのが楽しい、先生や仲間が温かく受け入れてくれるなど、安心感や所属感に支えられた学校生活の中で育まれるものである。

このように子どもたち一人一人が居場所を感じ、「学校へ来たい」と思える学校づくりを大切にする。

「期待」とは、「学校に行けば何か新しい発見がある」、「明日はどんなことを学べるのだろう」、「どんなことに挑戦できるのだろう」という前向きなポジティブな気持ちのことである。

子どもたちの好奇心や探究心を大切に、「知りたい」「やってみたい」「もっと学びたい」という意欲を引き出す教育活動を通して、学校を夢や可能性が広がる場にしていく。

子どもたちが学校を安心して過ごせる温かな場所とを感じるからこそ「来たい」と思い、そこに新たな学びや発見、成長の機会があるからこそ「期待」を抱くことができる。

子どもたち一人一人が『来たい』と思える安心と温かさに満ち、『期待』を抱ける学びと挑戦にあふれた学校の実現を目指すともに、私たち教職員も「明日も来たいと思える学校づくり」を目指す。

そのために、「安心・安全」「授業改善」「温かみ」を三つのキーワードにする。

5 目指す学校の具体的な姿

(1) 子どもたちにとって学校が「安心・安全な場所」であること

ア いじめの未然防止・早期発見・早期対応の徹底

◆「いじめは絶対に許されない」「一人一人の人権は尊重されなければならない」という意識を全教職員で共有し、組織的にいじめ防止対策を推進する。未然防止及び早期発見に向けて、年間3回の児童アンケートを実施し、その結果を分析・活用するとともに、年間1回以上、いじめに関する授業を実施する。

◆教職員を対象とした研修を年間3回以上実施し、いじめへの理解と対応力の向上を図る。うち1回は、いじめ重大事態への対応をテーマとして取り上げ、組織的かつ適切な対応ができる体制を整える。

- ◆いじめの未然防止は、一部の担当者だけでなく、全教職員が当事者意識をもって取り組むことが重要である。そのため、子どもたちが安心して自分の考えや意見を表現でき、それらが否定されることのない学級づくりを推進する。
- ◆どんな小さな変化も見逃さないという意識のもと、児童理解に努めるとともに、情報共有を徹底し、組織的な対応による早期解決を図る。また、児童がいつでも誰にでも相談しやすい雰囲気や環境づくりを推進する。
- ◆総合質問紙調査「i-check」の実施・分析を通して児童の実態把握に努め、いじめの未然防止及び早期発見につなげる。

イ 人権教育・安全教育の充実

〈人権教育〉

- ◆人権教育プログラムを基にして、人権教育を効果的に展開する。教職員一人一人が人権尊重の理念を十分理解する。
- ◆登下校中に率先して子どもに言葉を掛け、暖かく送り迎えをする。
- ◆子どもたちが互いの意見や作品等のよさを認め合うことができるような具体的な取組を行う。
- ◆子どものいじめ等による変化を見逃さず、学年や学校全体で情報を共有する。
- ◆欠席した子どもに対し、学校からの連絡内容が確実に伝わるようにする。
- ◆特別な支援を必要とする子どもに対し、その特性を適切に理解するとともに、できること、得意なことを伸ばす指導を心がけるなど、成功体験を増やし、自己肯定感を高めていく。
- ◆掲示物や物品等の教室環境を整える。
- ◆学校文書等については、様々な立場の人が閲覧することを想定して作成する。
- ◆個人情報の取り扱いについては徹底する。

〈安全教育〉

- ◆交通安全教室や通学路点検を通して、児童が危険を予測し、安全に行動する意識の向上を図る。
- ◆地震・火災・不審者対応訓練の実施、予告なし避難訓練の実施など、様々な場面を想定した訓練を行う。
- ◆熱中症対策については、WBGT（暑さ指数）に基づく活動判断、体育や外遊び前後の水分補給の徹底、全校昼会、学級指導等での熱中症予防指導、積極的な帽子着用を行う。

ウ 誰一人取り残さない指導・支援の充実

- ◆教職員が子ども一人一人の実態を共有し、組織的に支援する体制を整える。
- ◆ICTの活用や授業改善を通して、個別最適な学びの充実を図る。
- ◆校内委員会を充実させ、一人の子どもの支援方法を全体で共有する。
- ◆スクールカウンセラー、なのはな教室、ぽかぽかルームと、連携を強化し、一人一人に合った支援方法を行う。
- ◆本校独自の不登校把握の指標を基に、不登校の子どもの実態と変容を把握し、その時の最適な支援を講じていく。

エ サービス事故防止の徹底

- ◆「使命をまっとうする」「サービスニューズレター」等を用いた実践的な研修を行う。
- ◆サービス事故防止月間では、夕会などを使って、重点的にサービス事故について考える機会を設ける。

(2) 子どもたちにとって学校が「面白い・やってみたい場所」であること

ア 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

1単位時40分で学習指導要領の目標を達成し、子どもたちの資質・能力をバランスよく育んでいくためには、1単位時間の授業改善から、単元・題材の視点での「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が重要

- ◆導入、展開、まとめのプロセスを意識し、子どもの思考が揺さぶられる場面をつくる
- ◆日々の授業においては、「見通し・振り返り」「相互交流（考えの比較や、情報の収集）」「既習事項の活用・発揮」を意識した授業を行う

イ 自己選択学習の一層の充実

- ◆子どもが教科の本質（この授業は何を学ぶのか）を理解し、自分自身で学びを進めていくために、課題の設定、展開以降の授業の山場を教員が意識することが重要。そのために、適切な教材理解と、子どものつまづきや、出てきそうな考えを想定できる子ども理解を意識した授業づくりを行う。
- ◆アブラカタブラゴールドでは、安全管理の徹底に支えられた「子どもの得意」を伸ばす学習を実現していく。この際、教員は子どもの姿から「没頭する姿」「活動の中に、学んでいる姿があること」を自分の言葉で語れるようにする。

ウ 校内研修（授業研究）と校内 OJT の推進

- ◆授業研究は、授業者（授業学年）のみならず、参観者の学びであるという共通認識の基、「子ども」の学びに着眼することを意識する。
- ◆「この子のここで起こったこの学びは・・・」のように、子どもを主語にしながら、研究協議を進め、一人ひとりが「子どもを見取る力」「授業を分析する力」「学習指導要領に示されている内容を子どもの姿を基に、自分の言葉で語れる力」を磨いていく。
- ◆「バディ研修」では、職層のよさを生かし、その職層だから分かること、経験してきたことを伝えるようにする。（職層を超えてバディをつくるよさ）

(3) 子どもたちにとって学校が「温かみを感じる場所」であること

ア 子どもが意見を言い合い、認め合える心理的安全性の確保

- ◆特別活動を中心とした「自分たちが決定する」「自分たちの考えを表現する」場面を創出することで、子どもたちの「自己効力感」「自己有用感」を基盤した、「自己肯定感」を高めていく。
- ◆「対話」を重視した教育活動を行う。互いの考えを聴き合うことを意識する。
「あなたの考え（作品、演奏、行い方）いいね、ありだね」と言える関係性を育てる。この醸成が真の共生社会をつくる

◆子どもの些細な変化や成長、取組へのフィードバックを行うことで、学校に相談しやすい雰囲気をつくり、子どもが相談しやすい力を身に付けることにつなげる。

→援助希求できる力を身に付けさせる。

→教員が子どもから信頼される大人になっていく

イ お互いを認め、高め合う教職員集団の構築

◆「見つける・まねる・自分のものにする」を合い言葉に、互いの知恵を借りて、互いに伸びていく。

◆困ったことや気になること（バッド情報）は、一人で抱え込まず、気軽に声を掛け合える職員集団を目指す。特に保護者対応や事故対応では、迅速な情報共有を大切にする。

◆うれしかったことやよかった実践（グッド情報）は、笑顔で伝え合い、互いの元気と成長につなげる

◆目の前の業務に追われるだけでなく、先を見通しながら自分なりの働き方を工夫し、仕事と生活の充実につなげる

◆心身の健康を支える健康づくりの視点を大切にしながら、自分自身のコンディションを整え、いきいきと教育活動に取り組む